

学問より京の昼寝」と逆の意のことわざもあるから、人には色々な価値観や好みがあることもうかがえる。

乞食は茶碗の音に目を覚ます

絶えず物事に注意を払っている必要があるとの譬え。乞食は物乞い用の茶碗を自分の前に置き、それに小銭をめぐんでもらうのだが、その際にチャリンと音がでて、その音で目が覚めるというもの。この言い回しは1970年の将棋の升田幸三「勝負人生は日々これ戦場」(第5章)に「将棋の順位戦じゃないが、つねに勝負することによって、人間はきたえられるんですね。どんな剣客でも、もう安心していいとなると、腕はにぶりますよ。武士はクツワの音で目を覚まし、乞食は茶碗の音で目を覚ます、というんでなくちゃ」と用いられている。ところが、升田が使った武士は、乞食はの部分は、元々が「侍の子は轡の音で目を覚まし、商人の子は算盤の音で目を覚まし、乞食の子は茶碗の音で目を覚ます」という言い回しのものであったのだ。それを、意識的に一部を変えたか、無意識に変えてしまったか、あるいは、変わったものを記憶していたか、いずれかだろう。元々の方の意味は、親の仕事をみながら人は育つものだとの譬えだから大きく異なるのだ。

子供叱るな来た道じゃ、年寄り笑うな行く道じゃ

むやみに子供をとがめたり、年寄りをばかにしてはならないということ。子供は好奇心が旺盛であり、すぐ行動に移す傾向があることから、勢いそれが、悪戯になってしまうことがある。もちろん、大人の常識は子供にはないわけで、時としてそうした大人の常識とぶつかり、抑え込まれる。しかし、子供は悪戯をしながら成長する存在だとみれば、大人側の見方も変わろう。年寄りの場合も同様で、老化に伴う衰えは誰もが避けて通れない宿命なのだ。だから、もう少し寛容な態度や、長い目で見てやる姿勢が求められるのだ。見出し語は関西方面では明治時代にはいわれていたのだそうだが、全国的に知られるようになったのは1987年の永六輔の『無名人名語録』が取り上げたことよっていい。

転んでもただでは起きない

古くは「倒れる所^{ところ}に土をつかむ」とか「こけても砂をつかむ」と表現され、遠く平安時代の昔から用いられていた。ただ、以前はガメツイ人やそうした行為について否定的にいうものであったが、現代は不利な状況をプラスに転化するような肯定的な意味合いに変わったことわざだ。ただし、辞典の記述は古いものを踏襲している例が多

く、実際の言葉の現場に辞典が追いついていないケースとなっている。日本女子マラソンで初の五輪金メダル選手となった高橋尚子の『風になった日』(2001年)の中で、恩師となる小出監督と初めて出会った時の場面にみられる。「リクルートに入りたいという私の希望に対しては、『うちが大学生は採らないから:]』という言葉で終わってしまった。やはり無理なのか、これで就職浪人になるのかな、と思わざるをえなかった。でも、選んでもらう、採ってもらうこととは関係なしに、監督と出会って何か得て帰りたい、という思いもあった。転んでもタダでは起きない、転んだら何かひとつはもぎ取っていきたくて考えて、『自費でもいいから、合宿に参加させてください』と、お願いした」

酒米買うなら土地を買え

よい酒を造るにはそれに適した酒米が必要であり、それを育てる土地を選ばねばならないということ。これは日本酒造りに最適な米といわれる山田錦を育てる土地についていっている語句。よい酒米の条件は大粒であることと心白部分(米粒の中心にある白く濁った部分)が多いことだという。山田錦はこの二つの条件を最もよく具えていると認定されている。この山田錦を生産する土地として伊丹や灘の後ろに位置する